投影法による対人的価値観測定に関する研究

——測定方法の再検討——

宗方　比佐子

問題と目的

従来の価値観研究において，価値観の測定は主に質問紙法を用いて行われてきた（Allport，G．W．1931，Morris，C．1956，Rokeach，M．1968 など）。質問紙法による価値観測定とは，人為的な誘発によって個人の自覚している価値観を主に測定しようとするものであり，経済的に研究者の関心に合ったデータを入手でき，種々の統計的検定が可能であるといった利点があるかわりに，刺激状況が人為的であり，バイアスや誘導性があり，表面的，平面的な捕えしかできないなどの弱点があると見田宗介（1966）によって指摘されている。そこで，このような質問紙法の弱点を補うという意味から，Dukes，W．F．（1955）等は価値観の測定に投影法を使用することの必要性を以前から示唆しているが，最近Kilmann，R．H．（1974，1975）は絵画刺激を用いた投影法によって対人的価値観を測定する方法（KILMANN INSIGHT TEST）を考案した。この方法は，被験者に6枚のあいまいな対人関係の絵を見せ，18個の対人価値項目に対してそれらが絵とどの程度関係あるかを各絵ごとに7段階評定させるという形をとるものである。Kilmann，R．H．（1975）が述べているように，もしこのような価値観測定の間接的接近によって，回答者の自覚を越えた深い部分から価値観を引き出すことが出来るとすれば，現時点において解明されていない価値観内部の力動関係についての知見などを提供するなど，今後の価値観研究を大きく飛躍させることが可能であろうと考えられるので，価値観のこの種の測定方法の開発は有意義であると思われる。

そこで，本論文においてはKILMANN INSIGHT TESTを参考にしながら，「絵を見て物語をつくり，主人公の価値観を評定する」という内容をもった独自の対人的価値観測定用具を作成し，それを用いた調査結果の分析を通して，この測定用具の手続き上，分析上の問題点に関して検討を行うことを目的とした。

調査1

目的：調査1の目的は，Kilmann，R．H．（1974，1975）が考案した対人的価値観を測定する方法を，「物語をつくる」という過程を重視するように変更した上で，同じ図版を用いて実施し，より優れた測定用具の開発のために，さらに改善すべき点を明確にすることである。

方法：図版はKILMANN INSIGHT TESTの原図版6枚を使用し，項目は具体的な表現を心がけて翻訳された。被験者は絵を見て物語を想像し，想像した物語の主人公が18個の対人価値項目をどの程度大切にしているかを評定するように教示された。被験者は，大学生男子105名（有効データ数87）であった。

結果：全体平均・項目の因子分析・図版間相関の分析を通して，次のことが明らかになった。

1)．個人得点の全体平均に関して，自己記述形式（質問紙法と同じ）で測定された対人的価値観の従来の知見と調査2の結果を比較したところ，2種の異なった方法で測定された対人的価値観に，興味深い一致点と相違点があった。しかし同時に，この種の比較を行う場合により適切な図版が用いられねばならないことを強く感じた。

2)．項目に関する因子分析の結果から，Kilmann，R．H．（1975）が示した因子構造と全体的には類似がみられたが，部分的に食い違いがみられた。

3)．図版間の相関は全体的に低かった（$r = 0.27 \sim 0.08$）。このことから，個人は図版によって様々に異なった反応をしていることが予想される。

調査2への課題：以上のような調査1の結果をふまえて，調査2の課題を明確にすると次のようになる。

1)．調査1では，図版そのものの性質が結果に大きく影響を及ぼした可能性が考えられたので，調査2では被験者の文化的背景を考慮した刺激図版を用いること。

2)．項目の因子分析の結果，Kilmann，R.H.（1975）が示した因子構造と部分的に食い違っていたため，今後の研究の中でより明確にすること。

3)．図版間の相関が全体的に低かったことから，個人は図版によって様々に異なった反応をしていることが予想された。さらに詳しく分析し，図版に対する反応を加算する従来の方法が適切かどうかを検討すること。

4)．調査1では，被験者が実際にどの様な物語を空想したか，評定は物語を通して産み出されたか，に関して確認できなかったので，調査2ではこの点を確認する

こと。

5). 適切な刺激図版のもとで，投影法を用いて測定した対人的価値観と，自己報告形式で測定されたものとを比較し，異なったレベルから引き出されていると考えられている価値観の2側面の関連を明らかにすること。

調査2

目的：調査2では，調査1の結果をふまえて，対人的価値観を投影法を用いて測定するために，「絵を見て想像した物語を書き，主人公の価値観を評定する」という手続きをもち，文化的背景を考慮した12枚の試作図版を使用した独自の測定用具を開発し，この測定用具の手続き上，分析上の問題点に関して以下に示す3点を中心に検討することを目的とした。

1). 評定は想像した物語を通して産み出されたか。

2). 各図版に対する反応を加算する方法は適切か。

3). 自己報告形式の価値観とどの程度の関連をもっているか。

方法：調査2で対象とする被験者の年齢・性を考慮した上で，現代の青年男子が日常経験しやすい対人的場面を描いた図版の作成を試みた。項目は調査1より多少抽象的表現とし，評定は6段階とした。被験者は名古屋大学と大学院に在学する男子70名である。調査は1～5名の小グループで行われ，所要時間は約1時間20分であった。なお，図版の提示準備は順序効果を避けるために，可能な限りでランダム化された。

データ整理の経過：目的にかかげた3点の検討を簡潔に進めるために，次のようなデータ整理が行われた。

1). つくられた物語を整理し，対人関係の種類という観点を中心に，図版ごとの一般的特徴が把握された。

2). 項目の因子分析結果をもとに，「対人的徳性尺度」「成長尺度」「知的能力尺度」の3つの尺度が決められ，各被験者の各図版に対する3つの尺度得点が算出された。

3). 図版間相関と図版の因子分析結果をもとに，pair内の相関が高く（すなわちこの2枚の図版に対する個人の反応は似ている），pair 間の相関が低い（pair間で個人の反応は異なっている）ような2つのpairからなる4枚の図版（ＡＢＤＩ）が選び出された。

結果：上記のデータ整理を経て，目的にかかげた3つの課題に対する検討を行ったところ，次のようなことが明らかになった。

4). 物語に親和欲求，養育欲求を表現している人の方がこれらの欲求を表現していない人より，対人的徳性尺度の得点が統計的に有意に高かった。成就欲求を表現している人は，表現していない人より，成長尺度と知的能力尺度の得点が高かった。救助欲求と自主独立欲求に関しては，物語でこれらの欲求を表現した人としない人の間で，3つの尺度得点に有意な差がなかった。以上のことから，ある種の欲求を物語に表現した人は，その欲求を表現しなかった人に比べ，その欲求に関係のある項目を高く評定する傾向があったので，評定が物語を通じて生じたものであることが大まかに確認された。

5). 前述のデータ整理3）によって選定された4枚の図版ＡＢＤＩの間に次のような関連が見い出された。図版ＡとＢでは，同一尺度得点間に高い相関（$p < 0.01$）があった。図版ＤとＩの間にも同一尺度得点間に一部を除いて高い相関（$p < 0.001$）がみられた。しかし，ＡとＢを加算し，ＤとＩを加算した場合，両者の同一尺度得点間には，有意な関連がみられなかった。このことから，個人の反応は，図版によっては大きく異なっていることが明らかとなった。そこで，その場合には，各図版の得点を加算してしまうという従来の方法は好ましくないと考えられる。

6). 図版ＡＢと自己報告形式の間では，知的能力尺度に強い関連（$p < 0.001$）があり，対人的徳性尺度にも関連（$p < 0.01$）がみられた。図版ＤＩと自己報告形式の間では，対人的徳性尺度に強い関連（$p < 0.001$）があり，成長尺度にも関連（$p < 0.01$）がみられた。このことから，自己報告形式によって測定された価値観と，投影法を用いて測定された価値観の間で，従来の知見（Kilmann，R．H．1975）に反し，一部に強い関連がある事が明らかになった。

討論と今後の課題

本研究で用いられた対人的価値観測定の方法は，「物語を書かせる」過程を強調することによって，単なる知覚の反応としてではなく，ＴＡＴ本来の反応に近いものを引き出そうと意図したわけであるが，同時に評定という反応が生み出されるプロセスをある程度確認することができた。従って，「物語を書かせる」という手続きは有益であると思われる。

なお今後の課題としては，項目の因子構造をより一層明確にすること，投影法によって測定されたものが何を意味しているかをつきとめることがあげられる。また，最後に，今回の調査2では，12枚の図版の中から4枚の図版が選ばれ分析が行われた。この4枚の図版に関しては，2枚ずつ加算して分析することによって，ある程度高い信頼性が得られたわけであるが，今後この4枚の図版だけを用いた調査を行い，今回の結果に対する再吟味を行うことが，さし迫った課題であると考えられる。